

## 無功德

一人の老人が、大きな荷物をもって電車に乗ってきたとする。こんな時、私たちは席を譲るだろう。まさか知らん顔はできない。問題は、それから後の私たちの気持ちの動きにある。

「いや、どうもすみません。おかげさまで本当に助かりました」

老人がこんなふうにお礼の言葉を返してくれれば

「どういたしまして！」

と、いくぶん照れ臭い気持ちとほのかな満足感を味わうに違いない。

世の中のことが、万事こんなふうに進展すれば、問題はない。ところが、必ずしもこういうふうに流れるとは限らない。席を譲った時、無意識のうちにお礼の言葉を期待してしまう。しかし、その予想を裏切って、老人が一言のお礼を言わずに、チャッカリと座ったとしよう。その瞬間、「おやっ！」と思い、すぐさま「一言ぐらいお礼を言ってもよさそうなものだ。なんだこのじいさんは・・・」と、胸の内から濁った感情がドッと沸きあがる。

困っている人を見て、席を譲ろうと思った時は、おそらく無心であったはずだ。しかし、時間の経過とともに「親切にしてやったのに！」という「やってあげた」功德意識が芽生えてきたのである。原因は、「ありがとう」の感謝の一言が言われなかつただけのことにすぎない。これは、私たちの判断の基準や意識のあり方に問題があると言える。「お年寄りなのに大きな荷物をもって大変だな。」という純粹に相手を思いやる気持ちに基準がおかれれば、相手が「ありがとう」という感謝の言葉を言おうが言うまいが、全く関係のないことである。「今日は、あの老人のおかげで良いことをさせていただいた」と逆に感謝の気持ちになれば、「ありがとう」の感謝の言葉は、むしろこちらから言うことになる。見方を転換して考えると腹も立たない。

私たちは、いろいろなことにこだわる。良いことをしたらしたでこだわり、みんな自分の立場にこだわってものを考えようとする。親切をして親切にこだわらない。そんな生き方が出来たら最高かもしれない。

道元禪師は、「学道の人、吾我のために仏法を学することなかれ。ただ仏法のために仏法を学すべきなり」とおっしゃっている。つまり、仏法を最高価値とする生き方をしなければならないことを力説しているのである。仏法とは、無量無辺ということで、自分と言うちっぽけなはからいをもって考えても埒が明かない。何かを追い求める功利主義には仏法はないのだ。何かを求めようとすることは、徹底排除されなければならないのである。